

---

# ささやきの帰る場所

遊森 謡子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ささやきの帰る場所

### 【Nコード】

N4762U

### 【作者名】

遊森 謡子

### 【あらすじ】

灯台のある孤島に閉じ込められた、声を失った姫。異国の沿岸警備兵として身を潜めた、放浪の青年。故郷から遠く離れた地で故郷を守るうとする二人が、引き寄せられ出会う。沈黙を強いられる少女の謎に、青年は近づいて行く。

正統派FT目指して書き始めました。2人の関係をじっくり書く物語になりそうです。ささやきが届くほど近くにいたい…そこが私の帰る場所。

## 序章 蒸気船にて

どうして。どこに、連れていかれるのかしら……。

パドルの回転する振動が、セシータの腰かけた台に響いて来る。時折、床がゆつくりと持ち上がったのは沈み込み、胃の腑が浮かぶような気がする。

手すりを握りしめた細い指に、鈍色の海の飛沫が届いた。

セシータは十歳。シュリーレン帝国の属国である小国フォルツの、一貴族の娘に過ぎない。

そんな彼女を、養女としてもらい受けたいという話が、シュリーレン国王の名で届いた。要するに、人質ということだろう。

なぜフォルツの王族ではなく、弱小貴族の娘などを人質に取るのか、当初はセシータの両親もいぶかしんだ。

しかし、養女になるからには、身分は高貴なものになる。いずれは政略結婚の駒に使われるのだとしても、やはり高貴な男性の元へ嫁ぐことができるだろうということ、セシータの両親は戸惑いながらも、この話を受けた。

もちろん、断ることなどできない話ではあったのだが。

不思議に思いながらも、セシータは両親や姉たちに別れを告げ、夜を日について馬車でシュリーレンへと向かった。

愛する人々のために、人質として役に立てる。小さな誇りが、少女の寂しさを優しく包み隠していた。

しかし、シュリーレンの王城に着いて、宰相と名乗る初老の男に会った時。

痩せた黒髪の男は薄く笑って、こう言った。

「あなたの役目は、何も話さないことです」

意味がわからず、呆然と立ちすくむセシータに、男はさらに続けた。

「あなたが知っていることを、うかつに誰かに話してはなりません。人との接触は、ほとんど許されないと思ってください。もちろん、いつか誰かの元に嫁ぐということも、あり得ないでしょう」

男はゆっくりとセシータに近づき、覗き込むように見下ろした。

「最低限の自由は、与えてあげましょう。狂ったり、自殺されたりしては困りますから……たとえば、死んで生まれ変わっても、見つけ出しますがね」

硬質な紫色の瞳が、蝶を縫い止める針のように、セシータをその場から動けなくさせた。

「あなたはただ、黙って生きていればよい。そうすれば、あなたの大事な人々は、無事に日々を過ごせるでしょう」

セシータは混乱した。

人質に取られたのは、誰なのか。自分か、それとも故郷の人々なのか。

そして、

(この人を、どこかで見た事がある……)

それを自覚した瞬間、彼女の足元から背筋へと、恐怖が這い上がってきた。

故郷からついてきてくれた侍女は、大金を握らされて姿を消した。新しくついた侍女は、頻繁に顔ぶれが変わり、親しくなる間もない。

一年の間は、シュリーレンの王城の片隅に部屋を与えられ、わずかな時間だけ庭に出る以外は、ほとんど誰とも会わずに本ばかり読んで過ごした。

故郷との手紙のやり取りは許されたが、検閲が入った。

そのような軟禁生活でも、王城に出入りする人々の間で、セシータのことは自然と噂になっていたらしい。

ほとんど姿を見せない、誰とも話をせず沈黙する姫がいる、と。

そして。

「場所を移動してもらいます」

ある夜、突然尋ねてきた宰相にそう言われた。

大人しく従うほかないセシータが、黙って長椅子から立ち上がると、宰相は突然セシータに近寄り、髪の一部をまとめていたかんざしを引き抜いた。

月光のような白金の髪が、はらりとセシータの頬に落ちてくる。

「それは」

彼女は思わず声を上げ、手を伸ばそうとした。しかしまた、男の視線に縫い止められ、震えながら手を下ろす。

宰相はかんざしを手にしたまま、すぐに背中を向けて部屋を出て行った。代わりに侍女が入ってきて、セシータの荷物をまとめ出す。

透かし彫りの入った銀のかんざしは、故郷で七歳の祝いに両親にもらった大事なものだった。髪が伸びてからは毎日挿していた。

あれだけは、取り上げないで欲しかったのに。

セシータは唇をかみしめた。

そのままたった一人で、身の回りのわずかな荷物と一緒に馬車に押し込められた。

明け方に着いたのは、人気のない港。霧の立ちこめる岸壁にもやっつてある漁船が、波に揺られて陰気なきしみ音を立てている。

セシータと荷物を下ろした御者は、黙ってもう一度馬を御し、もと来た道に戻っていった。

小さな外輪のついた蒸気船から兵士が一人出て来て、荷物と一緒に船に乗せられた。

煙突から流れる蒸気が、船の後方へと流れ去って、霧と混じって消えていく。

(殺されるわけではないんだもの……大丈夫。言われたとおりにしていけば、お父さまお母さまお姉さまも無事で過ごせる)

セシータは船に揺られ、唇を引き結んだまま、心の中で唱えていた。

(大丈夫、私は黙っていればいい……ずっと、何も話さなければ……)

視線の先、灰色の空を背景に、灯台の立つ小さな島が見えていた。

## 1 灯台

シュリーレン帝国の、西の海に広がる岩礁地帯に、小さな島がある。

こんもりと木に覆われてはいるが、周囲はぐるりと断崖絶壁になっており、上陸できるのはたった一か所、崖にうがたれた急な小道のある場所のみ。

そして上陸したところで、ものの二時間も歩けば一周できてしまう、誰も寄り付かないような島だった。

クラトーは操舵室のすぐ外で、船べりにもたれていた。船が、島のすぐ近くを通過する。

「灯台がある……」

船底がきしむ音を聞きながらつぶやくと、舵輪を回す手を止めて兵士がひげ面を上げた。

「ああ、あの島か。そろそろ灯が入る時間だな」

「使われてるのか？ あの灯台」

「使われてるどころか、人が住んでる」

クラトーが軽く目を見開くと、兵士は笑って言った。

「灯台の足元に、小さな修道院があるんだ。世俗から離れるには格好の島ってことだろ。修道女の婆さんが住んでるから、時々物資を運んでやるんだ」

「じゃあ、その婆さんが灯台守をやってるってことか」

「まあ、そうだろうな。四年くらい前から、急に灯が入るようになったんだ。夕方からしばらくの間だけな。でも助かるよ、あれを目印にできるようになって以来、座礁する船が減った」

船から吐き出される蒸気が、すでに後方になった灯台の方へ流れっていく。

「年寄りだけの島だから、お前もこれから哨戒任務の時は、たまに

様子を見に寄ってやってくれ」

兵士は壁に貼られた紙を指でなぞって、何か確認してから、「さてと、哨戒航路はこんなもんだ。次からは操舵を頼む。…停戦協定さえ守られてれば、毎日変わりばえのない仕事だ」

「了解」

クラトーは、肩ベルトをかけ直した。背中で愛用の銃剣が、乾いた音をたてる。

十六の時に故郷を離れてから五年、手に馴染んだ武器だった。沿岸警備隊からも武器の支給はあったが、これを手放す気はない。

だんだん遠くなる島を振り返ると、ぽうつと温かな灯が浮かび上がった。灰色の空と海の風景の、そこだけが色づいたように見えた。

沿岸警備の仕事にクラトーが雇われてから、数日。

クラトーは、巡視船をゆっくりと島に寄せた。浮き桟橋に飛び移り、杭に船をもちやう。

急こう配の小道を上り、藪の隙間を抜けて平らな場所へ出ると、そこは木と蔦と花のトンネル。上から黄色い花の房がいくつも垂れ下がり、歩くクラトーの頭をかすめる。

緩やかな坂を登り、腐った倒木を乗り越えたところで、空間が開けた。

一軒の家があった。小さな菜園と背の低い果樹に囲まれた、木造の家。入口のドアには、小さな色硝子がはまっている。

軒下の、雨水を溜める樽の向こうをのぞくと、古ぼけた井戸。奥には小さな家畜小屋があり、その手前で茶色のむくむくとした鳥が二羽、地面をつついていている。

家のすぐ後ろには、巨大な煙突のように、レンガ造りの灯台が空に伸びていた。昼間なので、灯りは入っていない。

ドアは開け放たれ、なみなみと水の満たされたブリキの桶で抑え

られていた。桶の中には、つやつやした丸い葉をもつ白い花が浮かんでいる。

クラトーは、開け放ったままの戸口に立って呼ばわった。

「お届けものですよ」

中をのぞくと、三人の老婆が、一斉に振り向いた。

「あらあら、新しい兵隊さん？」

テーブルで手回しミシンを回していた老婆が、手を止める。

「ようこそいらっしやい」

スプーンを磨いていた老婆が、ところどころ抜けた歯を見せて笑う。

「荷物を持ってきてくれたの？」

草の蔓のようなものを編んでいた老婆が、こちらを振り向く。

(……全員、同じ顔に見えるんだが)

三人の区別がつかないまま、クラトーは中に入ると、背中の荷物を下ろした。板張りの床が、ゴトンと音を立てる。

すぐそばに大きな暖炉があり、中に渡された棒から大きな鉄鍋が下がって、クツクツと音を立てていた。

「重かったでしょ、ご苦労さま」

「今お茶を淹れるわね」

「甘いものは好きかしら？」

服装までみな同じ、黒一色の修道服に白の被り物では区別のつけようがない。クラトーは識別を早々にあきらめた。

そこは板張りの壁の広い居間になっていて、奥の方だけ白い漆喰壁になっており、壁のくぼみに小さな祭壇がしつらえられていた。ささやかな礼拝堂か。

クラトーは立ったまま、にっと口角を上げてあいさつした。

「おかまいなく。俺はクラトー、湾岸警備の仕事に雇われた。シュリーレンの生まれじゃないんで、この辺のことにはあまり詳しくな

いから、婆さんたち色々教えてくれよな」

「まあ、こんなお婆が役に立つかしら」

「ここで暮らし始めてずいぶん経つからねえ」

「この島のことなら、誰よりも詳しいけどねえ」

三人が声をそろえて笑う。

「灯台の管理もやってるんだらう。大変だな」

クラトーが言うと、三人の笑顔が深くなった。

「……私たちが灯を点してるんじゃないの」

「あんな高いところには、もう登れないからね」

「灯を点しているのは、森の精霊よ<sup>シルヴァン</sup>」

クラトーは苦笑した。

(あいにくと、俺はおとぎ話は信じない性でね)

クラトーは船に戻らず、森の中に潜んでいた。木々の隙間から、小屋と灯台が見えている。

(気になることは確かめておかないと。これも仕事だ)

空の灰色がだんだん濃くなり、夕暮れが近いことをうかがわせる。

森の中は暗くなるのも早い。

ねぐらに帰る鳥の鳴き声、遠くでかすかに船の汽笛の音。小屋の煙突からは、うっすらと煙が立ち上っている。

その時、灯台の玻璃板<sup>はりばん</sup>

灯室のガラスに、人影が映った。

## 2 森の精霊

クラトーは静かに動き始めた。木の間を縫って灯台まで近づき、開け放したままの入口からすべりこむ。

中からは、きりきり、きりきり…と何か細いものが引き絞られるような音がしている。

(重りを巻きあげているのか……)

重りが下りる時の力を、灯りを点す力か、それとも灯器を回転させる力に利用しているのだろう。確かに、あの三婆には無理かもしれない。

顔を上げた時、急こう配の階段の上の方が明るくなった。灯台に灯が入ったのだ。

塔の階段を静かに上り、いったん踊り場に出た。木箱の陰で様子をうかがう。上からは、まだ誰も降りてくる気配がない。そこからは梯子になっていて、上り口から四角く切り取られた光が足元に落ちている。

クラトーは軽く片方の眉を上げた。

この上の灯室にいる誰かは、こちらに気づいている。とまどい、動きを止めて息を殺す、硬質な気配が伝わってきた。しかし、誰何の声はない。

(気配を、悟っている……)

気づかれているなら、隠れても仕方がない。クラトーは梯子を数段登り、ゆっくりと目から上を灯室の床から出した。

森の精霊がいた。

(いや……違う)

クラトーは一度瞬きをした。

まず目に入ったのは、灯室の真ん中の巨大なレンズ。複雑な波模様の刻まれた何かの壺のような形のそれが、オレンジ色の光をたたえている。

そしてその向こう、玻璃板を背に座り込んでいたのは、十二、三歳くらいに見える少女だった。

白金のまつすぐな髪は灯りを反射して、紺色のワンピースを着た肩から流れ落ちている。琥珀色の瞳は大きく見開かれ、こちらを見つめていた。

「……………」

クラトーがもう一段梯子を上ると、少女はびくつと身体を動かした。

「ああ……………」いや、近づかないから安心していい。ここから動かないから」

クラトーは顔だけを上り口から出して、話しかけることにした。「俺は沿岸警備の兵士だ。君は？」

身体をすくませていた少女は、こちらから目を離さないまま大きく深呼吸した。落ち着こうとしているらしい。

「この島に住んでるのか？」

聞いても、まだ返事が返って来ない。

「……………」名前は何？」

すると、少女は瞳を揺らめかせながら、不思議な仕草をした。

右手が上がる。細い指が、喉をそつとなぞり上げる。そして、首が横に振られた。

「……………」声が出ない？」

クラトーが聞くと、少女は小さくうなずいた。

「筆談、とも思ったが、あいにく筆記具がない。

「君は……………」人間だよな？」

少女は軽く目を見開いて、首をかしげた。

(何を聞いてるんだ俺は)

クラトーは自分に呆れながら、次の質問をする。

「見習いの修道女？」

やや間があつてから、少女は首を横に振る。

「婆さんの孫か、ひ孫？　つまり、親戚か？」

また、横。

(じゃあ、なんでこんな孤島に……)

彼がどう質問しようかと考えているうちに、急に下から声がかかった。

「セシータ、そこにいるの？　ちょっと手伝っておくれ」

クラトーはすぐに頭を引っ込めると、踊り場の木箱の影に隠れた。

ややして、布の靴を履いたほっそりした足が、するすると梯子を降りてきた。床に立った少女はクラトーのいる方をちらりと見やつてから、今度は階段を急ぎ足で降り始める。

小さな頭の、耳の後ろのあたりで、髪の一部をまとめている細い棒が光った。それもすぐに階下に消える。足音はほとんど聞こえなかった。

(あれが、婆さんの言っていた『森の精霊』……)

クラトーが軽く息をついていると、また、しゃがれた声。

「……気をつけてお帰りよ」

遠ざかる気配。

(婆さんは何でもお見通し、か)

クラトーは肩をすくめると、少し時間を置いてから灯台を出て森の木陰に紛れて行った。

セシータは、人の気配に敏感だった。

時々、沿岸警備の兵士が荷物を届けに来ると、坂道を上って来る

途中でもうその気配を感じ取る。その時はすぐに灯台の中に駆け込み、身を潜めた。

そして、灯室の中で物音を立てないようにして過ごす。ぼろきれでレンズを静かに磨いたり、さら紙の写生帳に絵を描いたりしているうちに、兵士は帰って行く。

その気配が遠ざかり、蒸気船の煙が見えてからやっと、セシータは安心して住居へ降りることができた。

その日も、同じように過ごすのだと思っていた。兵士の気配が遠ざかってしばらくしてから、セシータはやっと安心して立ち上がり、灯室から梯子を降りた。

そして、レンズのすぐ下あたりに位置する巻き上げ機のハンドルを握り、分銅を巻き上げる。全て巻き上げれば、数時間は灯りを点すことができた。

もうすぐで巻き上がるという時、さっきの、あの気配がした。はっとしてセシータは手を止め、すぐに梯子を上った。さっきの兵士が戻ってきたのだ。……どうしてだろう。

灯台の、拡散する光とは違う　内に強いものを凝縮したような生命力。それが、灯台を登って来るのがわかる。強い存在感。そして、彼が姿を現した。

灯台を後にして、住居部分に戻ったセシータは、今ごろになって緊張を感じて胸が苦しくなってきた。

「セシータ、荷物が届いたのよ。片付けるのを手伝ってちょうだい」  
シスターの言葉に上の空でこくこくとうなずいて、壁際に置かれた荷物の所に行く。麻袋と木箱が一緒に紐でくくりつけられていたので、紐を切ろうとして暖炉の上からナイフを手に取った。

その手を、横から止められた。セシータが顔を上げると、シスターの優しい鶯色の瞳が彼女を見つめている。

「考え事をしているなら、危ないから後になさい。こちらへおいで」

彼女は大人しく、テーブルについた。

先ほどの兵士とは違う、暖炉の埋み火のように穏やかで温かいシスターの気配が、彼女の緊張をほぐして行く。

「さっきの彼に会ったのね？ 怖くはなかった？」

聞かれ、首を横に振る。

セシータにとって、シスター以外の人間に会うのは四年ぶりのことだった。まさか、灯台に人が入ってくるとは思わなかった。驚きが先に立ち、その存在感に圧倒されはしたが、怖れを感じる暇などなかったのだ。

セシータは人差し指をこめかみに当てて、首をかしげて見せた。

「そうね、不思議ね。クラトーさんって言うそうよ」

クラトー。その名前を、セシータは胸の内に刻みつける。自分より低い目線で、床の降り口から頭だけを出していたその人の、柊の葉のような緑の瞳とともに。

「怖くなかったなら、また次も彼が荷物を持ってきてくれるといいわね？」

セシータは素直にうなづく。

彼女の方からは話せないけれど、彼の話を聞いてみたかった。ずっと閉じられた世界にいたセシータの元に、外の世界の風が一筋、届いたような感覚だった。

## 2 森の精霊（後書き）

灯台の仕組みについては、大まかな所は調べて書いてはいますが、遊森の創作部分も含まれます。ご了承ください。

### 3 静かな茶会

クラトーがその島に赴くのは、十日ぶりだった。荷物を背負って船を下り、不安定な浮き桟橋をスタスタと渡って、狭い小道を上る。家と、灯台が見えた。クラトーは灯台の方にちらりと目をやる。一雨来そうな曇天のもと、森の陰にたたずむ煉瓦の灯台は、しんと静まり返っている。

「婆さん、荷物だよ」

相変わらず開放してある家の入り口を入ると、この日はシスターが一人、繕いものをしているだけだった。昼間でも暗い日で、テーブルには一つだけランプが灯してある。

「あら、お久しぶりね」

「今日は静かだな」

荷物を壁際に下ろし、腰を伸ばすクラトーに、顔中をしわだらけにしてシスターは微笑む。

「そうかしら」

ゆつくりと立ち上がって、暖炉の薬缶に手をかけるシスターの丸い背中に、クラトーは声をかけた。

「えーと、次に来るときの荷物のリストは？」

「あら、急いでいるの？」

「いや、そういうわけじゃないけど」

クラトーは視線をはずし、部屋を見回す。

注意して見ると、戸棚にいくつか並んだ木のカップの一つには、可愛らしい小花模様が彫り込んである。テーブルの隅の椅子には、小鳥の刺繍の入った膝掛けがかけてあった。

「はい、これ。いつもご苦労さま」

我に返ると、目の前に籠が突き出されていた。受け取ると、シスターは微笑んで、またゆっくりとテーブルに戻っていく。

籠の一番上には、ざら紙に書かれた荷物のリスト。その下の布をめくると、コルク栓のしてある広口のガラス瓶。中で澄んだ薄緑色の液体が揺れ、その熱で瓶を曇らせていた。他に、ブリキのカップと、素朴な焼き菓子が二つずつ。

(……お茶してけ、と)

横目でシスターを見ると、もう彼女は繕いものを再開したところだった。

(あの少女について、シスターに聞いてみようか)

一瞬そう思ったクラトーは、しかし結局、

「どうも」

とだけ言ってリストをポケットに突っ込むと、籠を手の外に出た。たぶんかわされるだけだろうと思っただし、少女とほとんど話もしないうちから他者に少女について聞くのも、無粋な気がした。

灯台の階段を登り、踊り場から梯子に手をかける。ぎし、と梯子がきしむと、天井の向こうでわずかに気配が動く。

「……お届け物です」

クラトーは上り口から、頭よりも先に籠を持った手をつき出した。床に置いて、少し向こうへ押しやる。

待っていると、ややして静かに細い手が籠の持ち手を握り、向こうへ消えた。

一呼吸置いてから、クラトーはゆっくりと頭を上に出した。

少女は、初めて会った時と同様に、巨大なレンズの向こう側でこちらを注意深く見つめていた。今日は髪をすべて結い上げていて、

少し大人びて見える。髪は、あの飾り気のない棒のようなものを挿してまとめているようだ。

クラトーは上り口にあごを乗せた。

「どうも。首だけ男です」

静寂。

クラトーは謝りたい気分になった。

目を丸くしていた少女　セシータは、戸惑ったようにうつむいた。そして、目の前に籠があることを思い出したらしい。

急いで中身を取り出そうとして、ぱつと手を引いて自分の耳に触れた。思いの外、瓶が熱かったようだ。

慎重に布で瓶をくるみ、コルク栓を外し、並べたカップに注ぐ。

香草の香りが広がり、湯気が灯室の天井に上っていく。目で追うと、ドーム状の天井に小さな窓がいくつか切られていて、四角く灰色の空が見えていた。灯台の熱を逃がすものらしい。

「ここ、冬は暖かくて良さそうだな」

クラトーが言くと、セシータが瓶を置きながらちらりと彼を見た。目元が、少しだけほころんだ。

セシータは立ち上がると、近くにあった小さな木製の踏み台の上に布をひろげ、そこにカップと焼き菓子を一つずつ置いた。そして、それを恐る恐る、クラトーの方へ押しやると、さっと元の位置に戻った。

再び、静寂。

踏み台は、クラトーが手を伸ばしても、あと一息で届かないという位置にある。彼女の警戒線が、ここまでということらしい。

「……あー。ちょっと上るよ」

クラトーは断りを入れてから、梯子を数段上った。足はまだ梯子の上に残したままで、ぐっと上半身を乗り出して踏み台に手をかける。セシータは瞬きもせず、彼の動きを凝視している。

踏み台を引き寄せたクラトーは、登り口のすぐ右側に腰かけて足を降ろしたまま、壁を背もたれにした。

無造作にカップを手に取り、口をつけて見せると、セシータもゆつくりとカップを包み込むように持った。

ほのかな緊張感をはらんだ、静かな茶会。しんとした灯室に、外からかすかに汽笛の音が響く。

「うまいな、これ」

兵士が焼き菓子を口にしてつぶやいたので、セシータは真っ赤になった。

（シスターがこれを入れてくるなんて……そんなつもりで作ったわけじゃ）

自分の菓子に目をやる。長方形に、少し櫛のような切り込みを入れてあるだけの、特に飾り気のない菓子。

「え？ 何？ 君が作ったの」

すぐに見抜かれて、どうすればいいのかわからなくなってうつむく。両手で持ったカップから立ち上る湯気を透かして、そっと様子を窺うと、彼は目を細めて笑っていた。

今までは、梯子から首を出したところしか　まさに彼の言うとおり、首だけの状態の彼しか見たことがなかったが、今は膝から上が彼女と同じ空間にある。

立ってはいないが、背が高いのがわかる。濃いオリーブ色の兵士服、鍛えられた身体。まくった腕からのぞく、古い傷。肩にかけたベルトを目で追うと、頭の横に銃口が見えている。

そして、顔。何でも見通しそうな瞳、少し上がり気味の、意志の強そうな眉。鼻筋が通り、口元は……。

「あのさ」

その口が動いて、セシータは思わず背筋を伸ばした。

「灯台の灯を点してるのは、君？」

ここに来てからのことなら話しても構わないだろうと判断したセシータは、うなづく。

「ここに来てからだよな。灯りが入りだした　四年前？」

はっとして、また少し緊張する。彼女の脳裏に、揺れる船内とうねる黒い波が浮かんだ。

### 3 静かな茶会（後書き）

ウケなかったらしい。クラトー、残念。

セシータが作った菓子は、北欧のカンパニスという菓子をイメージしています。カンパニフィンランド語で『櫛』だそうです。

#### 4 埋もれた光

四年前のあの日、セシータは無口な兵士にこの島の小さな礼拝堂に連れて来られ、シスターに引き渡された。戸惑いながらもここで暮らしを始めた彼女に、灯台がまだ機能することをシスターが教えてくれた。

一人で灯台の階段を上り、外の回廊に立つ。海風が吹きあげて来て、セシータの髪を揺らす。

西の海をしばらく眺めてから、北側へと回った。黒い森の合間にうねる丘。家畜の群れがゆつくりと移動している。海へと向かう灰色の川が、時折ちらちらと光る。

この丘や森の向こうが、属国エクザック。セシータの故郷フォルツは、さらにその向こうだった。遠い祖国は、ここからは見えない。胸が苦しくなって、セシータは回廊の手すりにすがってうつむいた。遠い地面に目がくらみ

白昼夢を見た。

薄暗い石造りの城、大きな広間。

絨毯の上に膝をついて荒い息をついているのは、自分。

目の前に、ほどけた長い髪が垂れて揺れているが、その色は白金ではなく、黒に近い深い緑だ。

剣を杖の代わりにして立ち上がろうとするが、身体が言うことを聞かない。視界がぶれ、剣に刻まれた紋章がかすむ。どこか、怪我をしている……。

誰かがそばにいるのを感じて、顔を上げた。

そこに、あの痩せた黒髪の男が

すぐ近くを海鳥が羽ばたきながら飛び去って、セシータは我

に返った。あえぎながら後ずさると、灯室のガラス板にもたれてしゃがみこむ。

シュリーレンの宰相に会った時、どこかで会ったことがあると感じた。それは夢で、だっただろうか。

あの男が「話すな」と言う理由とさえ、セシータにはそれしか思い浮かばなかった。でも、あれは夢。夢のはずなのに……。

だが、ここに至ってはそれもどうでも良かった。今、セシータにできることなどないのだから。

息を整えてから振り返ると、灯室の中に不思議な形容のレンズが見えた。

(この灯台に灯りを点したら……光は、フォルツに届くのかしら……)

思い出から浮上すると、クラトーがこちらをじっと見ていた。セシータが逸らした視線の先に、置きっぱなしにしていた写生帳がある。見るともなしに見ていると、彼が言った。

「……ペン？」

クラトーに向き直ると、彼は自分の頭をちよいちよいと指さしていた。

何のことを言っているのか気づき、急に胸の中で熱いものがふくらんだ。セシータは自分の頭に手をやり、それを引き抜いた。髪が肩から背中をすべり落ちる。

クラトーが手をびくりと動かし、わざわざ抜かなくても、思ったのだから。

手にのせて彼に見せたのは、ニードル状の金属ペンだった。

奪われたかんざしの代わりにと、きれいに磨いて髪に挿していたそれに、目の前の男性が目を止めたのだ。

かんざしのことを伝えるつもりはなかったが、ペンを見せたのは秘密を一つ打ち明けるような気持ちだった。嬉しかったのだ。

「古いものだな」

つぶやくクラトーに、セシータは彼の背後を指さして見せた。彼が指の動きを追って、振り向く。

「……がらくた？」

彼の後ろには、古い木箱、折れた船のオール、小さな黒板、救命ブイなど、雑多なものが積まれていた。この灯台に残されていた物だ。

「この中にそれがあつたつてこと？」

うなずくと、クラトーは「ふーん」と後ろに手を伸ばして、

「何だこりゃ……」

とラップ状のものを手にとって、穴を覗いている。セシータは両方のこぶしをつなげ、口元にあてて見せた。彼が手にしているのは『霧笛』だ。

「吹くのコレ」

クラトーが息を吹き込むと、ポオツ、という音が響く。霧の中、灯台の光が届かない時に、船を導くために吹くものだった。昔、ここで使われていたのだらう。

セシータは、そんな兵士の動きをひとつひとつ、見つめていた。

もう一度「ふーん」と言って霧笛を元の場所に戻したクラトーは、セシータに向き直った。

「あのだ。君は、自分の意志でここに住んでるの？」

また、緊張感が戻ってきてしまった。セシータは彼と目を合わせ

られなくなり、うつむく。

「いや……街に出たりしないのかと思って」

言われ、急いで首を横に振った。

出歩いたりしたら、きつと何か恐ろしいことがある。あの男に、また別の場所に閉じ込められるかもしれない。今度は、たった一人で。

「じゃあ、手紙書いたりして？ 誰かに届けるなら、俺が」

もう、やめて。

セシータは飲みかけのカップを置いて、ぱつと立ち上がった。レンズを回り込み、クラトーから身を隠すようにする。

シュリーレンの王城にいたころは、検閲が入るとはいえ故郷と手紙のやり取りをしていたが、ここに来てからはそれもなくなった。家族は不審に思っているだろうか。それとも、不審に思われないように誰かがセシータの代わりに手紙を書いているか……ありそうなことに思えた。

もしそんな偽の手紙があるとして、今、自分が故郷に手紙を書いたら、内容に齟齬をきたさないとはいえない。今の自分の境遇を家族が知ったら、どうなるのだろうか。

そこまで行かずとも、手紙を出したことがあの男に知れたら。

セシータは自分の身体を抱くようにしてうずくまり。膝に顔を伏せた。

「ごめん。悪かったよ。ちょっと気になったただけだ。嫌ならもう聞かない」

ことん、とカップを置く音がして、はつと顔を上げる。帰るのだろうか。

そつとレンズの影から顔を出すと、クラトーはまた首から上だけを上り口から出して、こちらを見ていた。

「そろそろ帰るよ。また来るからな」

言われて、思わずうなずいた。また来て欲しい、という気持ちを込めて。

兵士は少し笑って、ちょっと手を上げると、上り口から姿を消した。

少し時間を置いてから、セシータは急いで梯子を下り、灯室のすぐ下の踊り場から外の回廊に出た。

クラトーの後ろ姿が、木立の間にちらちらと動いて、すぐに見えなくなった。

彼の話を聞いてみたいのに、結局質問ができないままだった。でも、これでいいのかもしれない、とセシータは思う。あまり親しくなると、いつかの侍女たちのように、もう会えなくなるかもしれないのだから。

その日も、セシータは灯台に灯を点した。

光が、どこかに届くように。

#### 4 埋もれた光（後書き）

ずっと昔にファッション雑誌で、色鉛筆をかんざし代わりにしてる  
パリジェンヌの写真を見ました。あれ可愛かったなあ。

## 5 調査

その日の夜、クラトーは沿岸警備隊の寮の食堂で、早めの夕食をとっていた。機械的に食事を口に運びながら、考えに沈む。

やはり、セシータの様子が気になったのだ。人と話すことには飢えているようなのに、少し踏み込むと怯えて逃げる。十二、三歳くらいの少女がああ小さな島に隠れ住んでいるのはなぜなのか。親はどうしたのか。

(俺に、関係はあるだろうか)

顔を上げ、ちらりと視線を巡らせる。食堂の中のざわめきは、クラトーの故郷のざわめきとはわずかに抑揚が違っているが、もう慣れた。兵士たちが思い思いに、食事をしたり新聞を読んだりしている。煙草の煙が、低い天井でわだかまっている。

残っていた魚の酢漬けを口に放り込むと、クラトーは立ち上がった。食器をカウンターに返して食堂を出る。

そのまま、門衛に声をかけて隊の本部を出た。一日中雲のかかっていた空は、灰色のままその色調を落とそうとしている。薄闇に包まれた緩やかな坂道は、整備されているとは言い難く、小石を蹴りながら街へと下った。

港街ローゼイには、小さな建物が密集している。すでに店のほとんどは、テント状のひさしをたたんで店じまいを始めている。

クラトーは一本裏手の道に入った。こちらの道でも、ガチャガチャと何かを片づける音や水音などが喧噪を醸し出していた。

一人の初老の男が、何かの袋を手に裏口から出てきて、クラトーに気づいた。

「どうも」

手を挙げると、小太りな男は首にかけたタオルで顔を拭きながら、ちよつと眉をしかめた。

「クラトー。まだここにいらっしゃるんですか」

肩をすくめ、クラトーは応える。

「ご挨拶だなあ、アイザル」

「……まあ、中へどうぞ」

アイザルと呼ばれた男は袋を壁に寄せて置くと、クラトーを促して裏口から中に入った。

中は倉庫だった。天井から下がったランプの明かりで、雑多な荷物が照らされている。狭い通路の向こうに店の表が見え、棚に所狭しと並べられている雑貨が視界を狭めていた。アイザルの妻が露台をしまっているところで、こちらを見て軽く会釈をした。彼女はそのまま、自分の仕事を淡々とこなして行く。

「ちよつと、聞きたいことがあつて」

クラトーは尋ねた。

「四年前。白金の髪の毛、親と離れて暮らしている、たぶん良家の女の子。つて言つて、何か心当たりある？」

アイザルは器用に片方の眉を上げた。

「恋人の身元調査ですか」

クラトーはあわててつけたした。

「年齢は、十二、三歳くらい」

「………恋人の身元調査ですか」

「何でそうなるっ」

「冗談です」

アイザルはしれつと答えると、「それだけじゃあね」と腕を組む。「あとは…そう、この辺では見ない髪型をしている。まとめて、細い

棒を挿してるんだ」

「かんざしを？ フォルツの方の風習かな……」

「フォルツ？」

クラトーが聞き返すと、アイザルは二重あごを胸元に埋めるようにしてうなずいた。

「まあ、調べてはみますが……何かありそうなんですか」

「今の所、単純に俺の興味本位だから、何かのついででいいよ。あつちにも報告しなくていいから」

クラトーは、ここシュリーレン帝国の属国であるエクザツクの生まれだ。そして、アイザルも同郷だった。

彼は一般の客以外に、沿岸警備隊に搬入する物資も扱う雑貨店を営んでいる。そしてそれが本業ではあるのだが、実はもう一つの仕事を持っていた。

ありていにいえば、アイザルはエクザツクの諜報員だった。

と言っても、どこかに潜入したり何かの工作を行ったりするような、能動的なものではない。シュリーレンに移民としてやってきて国民として溶け込み、この地で配偶者を得て暮らす。

そのまま何事もなければ、故郷を離れたこの地で一生を終えるわけだが、有事の際には本国に報告せねばならない。特にアイザルの仕事は物流に関わっているため、もしもシュリーレンが戦争の準備を始めるとすれば、戦争の数ヶ月前から物流の動きで気づくことができる。

そのようなことがあれば、彼はすぐにシュリーレンを出て、本国へ報告に走るのだ。もしも怪しまれる危険があるなら、家族を置き去りにして。

それが、あるかないかもわからないアイザルのもう一つの仕事だった。

「うちは子どもに恵まれませんでしたからね。妻一人くらい、連れていく甲斐性くらいはありますよ。まあ、本人について来るつもりがあれば、ですが」

最近、彼はそんな風に言ったことがあった。妻には、少なくとも彼からは、打ち明けていないらしかった。

アイザル以外にも、いくつかの街でエクザツクの諜報員が穏やかな生活を営んでおり、表向きは同郷の人間同士の互助組織のような形で情報のやり取りをしている。もしかしたら、あの謎の少女について知っているものがあるかもしれない。

クラトーは、上着のポケットからメモを取り出した。

「あと、別件。急がないからこれ揃えといてくれる？　いつものやつ」

島のシスターから受け取った、荷物のリストだった。代金は教会本部から出る。

「わかりました。揃ったら連絡しますよ。……クラトー、戻らないつもりじゃないですよね？」

クラトーはそれには答えず、ただ軽く手を振って、裏口から外へ出た。

本部に戻り、寮の自分の部屋に入ると、同室の兵士から書類を渡された。見ると、数日後に首都から視察団が来るとのことで、その警備の配置に関するものだった。

ざっと目を通して、頭に入れておく。彼はいつも通りの仕事をやるだけだった。

視察団の代表者は、シュリーレン宰相のロキユエ・セヴロン、と

ある。

（ああ、あの……勲功を立てていきなり宰相に引き上げられたとかいう。なんとなく不気味な男だよな）

その時は、そう思い浮かんだだけだった。

## 6 灯台の沈黙

陽が落ちようとしていた。

セシータは、修道院の裏の草地につないでいたヤギを連れ、家畜小屋へ向かった。

この島は狭すぎて、牛や馬を飼うのには向いていないが、彼女よりも以前からここに住んでいるヤギが乳を出してくれる。セシータもシスターに教わって、ずいぶん乳絞りが上手くなった。

故郷は恋しかったけれど、この場所がセシータに与えてくれるものは多かった。小さな世界は濃密で、大事なものを拾い上げやすく、そしてどこかへ流してしまふことなくずっと持つていられる。

ヤギを小屋の中へ入れてから、灯台の方へと回りこんだ。そろそろ、灯を点す時間だ。

建物の陰になった場所は苔むしていて、そのささやかな緑がセシータは好きだった。踏まないようにと、下を向いて避けて歩く。

灯台の前まで来てやっと顔を上げた時、セシータは息を止めた。

あの男が、修道院の前に立っていた。気配をまったく感じなかった。

四年ぶりに見た、酷薄な瞳。そげた頬。漆黒の髪。セシータをここに閉じ込めた、この国の宰相。

灯台の中へ逃げ込もうという考えが頭の隅をかすめ、すぐに自ら打ち消す。灯台には入口が一つしかない……逃げ場がない。

クラトーが来た時は、怖くなかったのに。

凍りついたように動けないセシータに、彼は優しいと言ってもいい表情で近寄ってきた。

「大きくなりましたね」

あごを軽く持ち上げられた。冷たい指に、背筋がぞくりとする。

「声を聞かせてはくれないのかな？」

言われて思わず、唇が震えた。

この男に「何も話すな」と言われてから、話すのが恐ろしくなった。四年前に会った時は一言二言かわしたが、今ではそれさえもなくなり、声の出し方も、自分の声さえ忘れてしまった。

この男は、セシータに対して言葉で脅すだけで、具体的な行動には出ていない。それなのに、なぜこんなに恐怖を感じるのか。

呼吸音さえ聞かれるのが恐ろしくて、はっ、はっ、と小さく短い息を繰り返す。めまいがする。

また、どこかへ連れて行かれるのだろうか。

そんなセシータの様子に満足したように、宰相は少し口の端を上げると、彼女を置き去りにして修道院の開放したドアから中に入ってしまった。

セシータはその場にしゃがみこんだ。震える息を押さえるように、両手で口をふさぐ。

宰相はすぐに修道院から出て来て、セシータを一瞥してもう一度凍りつかせると、

「様子を見にただけです。このまま元気で過ごさない」「と投げ捨てるように言つと、長いマントの裾を揺らしながら去って行った。

姿が見えなくなつてから、どつと汗が噴き出した。目がかすんだ。気がついたら、ベッドの中だった。セシータをのぞきこむシスターも、顔色が白く見える。シスターに微笑みかけ、また目を閉じる。短い夢を、いくつも見た。それは幼いころの、両親が誕生日を祝つてくれた時の思い出だったり、姉と庭で花冠を作つた時の思い出だったりした。

幸せな夢がすつと消え、次に現れるのは、あの夢。自分が自分ではない女性になつて、剣をふるつたり、馬に乗つて街道を駆けていたりする。

戦場での場面もあつて、血が流れるのを目の当たりにすることもあつたが、ぼんやりと見えているだけで匂いや感触がないせいか、現実感がなかつた。

ふつと浮上するような感覚があつて、次に見えたのは、警備兵のクラトーの顔だった。少し眩しく感じて目を閉じそうになつたが、セシータはこらえて彼の瞳を見つめた。

（あなたはどうして、私に会いに来てくれるの？）  
尋ねたかつたが、結局そのまま景色は霞み、セシータはまた夢の中に落ちて行つた。

クラトーは、軽く眉をひそめた。  
いつもの航路を巡視船でたどり、岬を回り込んで、あの灯台が見え始めた瞬間のことだ。

「あれ、今日は灯台、明かりが点いてないね」

今日は、警備隊に出入りの武器商人が同乗していた。デッキの手すりに手をかけて煙草をくゆらせながらつぶやいている。海上にはすでに宵闇の帳が降り始めていて、商人の指に挟まれた煙草の火が、波の動きにあわせて赤く揺れている。

「婆さん、調子でも悪いのかねえ」

つぶやいた男は、大して心配している様子もなく、すぐに話題を変えた。

「宰相さんの視察、終わっただんですか？ 昨日は、船もずいぶん出たし皆も兵隊さんだらけで、ずいぶんものしかつたけど」

「あ、うん。ついさつき、視察団は出発して行ったよ」

クラトーは灯台を見つめながら、操船に集中している振りをした。岩に戻り、いつものように報告を済ませて食堂で夕食をとる。食堂を出るとき、街の警備から戻った同僚が入ってくるのに行き合っ

た。

「お疲れ。あのさ、灯台の明かり、ついてたか？」

「え？ ああ、そっぴやっついてなかったな」

クラトーはそれを聞くと、身を翻してまっすぐに外へ出た。

街側ではなく海側に周り、外壁に沿った石の階段を降りていくと、警備隊専用の棧橋に出る。無線機と机と椅子しかない詰め所だけが明るく光っていて、その向こうの海は黒々と暗く凪いでいた。

「あれ、クラトー」

開けっ放しの詰め所のドアから、年輩の整備士が椅子を傾けながら顔を出した。

「ちよつと出ます」

「え？ 予定にないよね」

「灯台、真っ暗でしょ？ あそこ、婆さんだけだから、なんかあったのかと思って。様子見てこようかと」

「へえ、年寄りの面倒見いいねえ、見かけによらず」

「いやあ、ばあちゃんが死んだときのこと、思い出すですよねえ

……心配だ心配だ」

クラトーは首を振ってみせると、喫水の浅い小さなボートに乗ろうとした。夜は座礁の危険が高い。

「あ、こっち使えば？ 今日点検したばかりだから」

整備士が一つとなりに舳つてあったボートを指す。大型船と陸地との連絡に使う、やはり小型のボートだった。

「ふーん、今日？」

相槌代わりに聞き返すと、整備士はニヤリと笑った。

「宰相さんと護衛さんが、急に使いたいって言うから。さっき、帝都に帰る直前にそれでここから出かけてったよ。すぐ戻って来たけど。何か、抜き打ち査察でもやったんじゃないの？」

クラトーはそれを聞くと、一動作で船に飛び乗って船外機のハンドルを握った。

## 7 写生帳

夜は、目的物が実際よりも遠くに見える。

ようやく島が近づき、船体に取りつけられた緩衝材が浮き棧橋に接触するのももどかしく、クラトールはカンテラを手に船を飛び降りた。手早く係留し、崖に穿たれた細い坂道を駆け上る。

木々の作る暗闇の中、カンテラの灯に羽虫が寄って来るのを無視しながら、足場の悪い道を速足で進んだ。

やがて、灯台の黒いシルエットと、修道院の窓の灯りが見えた。ひとまず、灯りがついていることに安堵する。

入口のドアは閉まっっていて、地面に色硝子の色彩が模様を描いていた。

ドアをノックする。

「警備です。シスター、夜遅くにごめん」

声をかけ、少し待つと、何の気配も感じさせずにドアがすつと開いた。

「こんばんは」

まるで待っていたかのように、シスターが立っていた。逆光のせいか、いつもより表情がないように見える。

「灯台を見て、来たのね？」

聞かれ、クラトールがうなずくと、シスターは一步脇に避けてクラトールを中へ通した。

温かな空気と、さまざまなものまじりあつた匂いに包まれた。

銅製の薬缶を手にしたもう一人のシスター（やはり見た目の区別はつかない）が、暖炉の前でクラトールを見てかすかに微笑んだ。

「熱を出したんだけど、だいぶ下がって来たわ」

と視線を動かす。

視線をたどると、奥の祭壇の手前に開け放したドアがあった。布を巻いたレンガで押さえてあるドアに近寄り、クラトールは中をのぞいた。

寝室だった。冬はかなりの寒さに見舞われるこの地方独特の、壁に埋め込まれたような形のベッドには、冷気を遮るためのカーテンがついている。

脇に寄せられたカーテンの手前に、三人目のシスターの後ろ姿があった。その向こう、枕の上に、白金の髪が緩やかに流れているのが見える。ベッド脇の小机に立てられた蝋燭の横に、小さな衝立が置いてあって、ベッドに横になった人物に直接光が当たらないようになっていた。

シスターがこちらをちらりと振り返り、ベッドの方へ何か小声で話しかけると、椅子を立った。

クラトールの横まで来て、顔を見て微笑むと、開け放したドアから外へ出て行く。動いた空気は、少しひんやりとしていた。

静かにベッドに近寄る。椅子に腰かけながら、蝋燭の衝立を少しだけ動かすと、セシータの白い顔がほのかに浮かび上がった。

これだけ彼女のそばに近寄るのは、初めてだった。名前を読んでみようとして、クラトールは思いなおして口をつぐむ。力なく横たわる様子は、いつもよりもさらに幼く見えた。

額に布を乗せている彼女から、清涼感のある香りがする。シスターが何か、発熱に対する処置をしたのだろうか。

閉じられた瞳の睫毛がふるえ、蝋燭の明かりを弾く琥珀が現れた。潤んだ瞳がゆっくりとめぐらされる。

クラトールと目が合うと、セシータは軽く眉をひそめた。眩しそうにも見えるし、いぶかしんでいるようにも見える。

クラトーはなるべく、自分の気配を消そうと意識した。今、彼女を怖がらせたくはない……夢だと思ってくれば、一番いい。

見つめ合う。ややして、彼女の唇が少し開いた。

しかし、そのまま唇は閉じられ、ゆらめく琥珀も見えなくなった。

胸元がゆつくりと上下するのをいくつか数えてから、クラトーは静かに立ち上がって寝室を出た。

シスターが一人だけ、暖炉の前の椅子に腰掛けていた。ほかの二人は……家畜の様子でも見に行っているのだろうか。

「今日、ここに誰か来た？」

クラトーが尋ねると、シスターは暖炉の火を見つめたまま答えた。

「ええ。その後、急に熱を出しちゃったのよ」

「……何があつたんだ？」

「来て、あの子の顔を見て、帰っていききましたよ」

シスターは嘘はついていないようだが、話さないで済むことはなるべく話さないようにしているようだ。

「何か、必要なものはある？」

必要な「物」というだけでなく、言外の意味も込めて尋ねる。

シスターはやつとクラトーのほうを見ると、微笑んだ。

「また来てちょうだい」

クラトーはうなずいた。言われなくとも、そうするつもりでいた。

シスターもうなずくと、また寝室に入ってしまった。彼女のそばにいてくれるのだろうか……彼の出番はないようだった。

小屋を出たクラトーは、船に戻りかけてふと、足を止めた。

夜も、海には数隻の船が出ている。灯台を点すことができれば、彼らの助けになるだろう。

灯台の入口をくぐった。螺旋階段を上っていき、踊り場に出てカ  
ンテラをかざすと、塔の中央にハンドルが取り付けられた箇所があ  
った。灯室のレンズのある場所の真下あたりだ。

ハンドルが止まるまで回転させる。きりきり、と聞き覚えのある  
音がする。抵抗はクラトールにとっては軽かったが、かなりの時間が  
かかった。

これをセシータがやっているのなら、いい運動になっているだろ  
う。この狭い島の中では貴重かもしれない。

手を離すと、ハンドルはゆっくりと逆回転を始め、同時に梯子の  
上の登り口が明るくなった。レンズに灯が点つたのだ。

梯子を登り、いつものように頭を出してみた。レンズが強い光を  
発しているのを確認する。

灯室に上がってみた。

セシータは昼間、この空間で過ごしていることが多いのだろうか…  
…と、ぐるりと見回す。

ふと、灯室の床に落ちているものに気がついた。写生帳だ。いか  
にも書きかけというように、黒炭を上に乗せて開いたまま置かれて  
いる。

クラトールはふと、頬をゆるめた。そこには、霧笛を吹くクラトール  
の上半身が描かれていたのだ。

「うまいな」

つぶやきながら手に取り、他にも自分が描かれているのかとペー  
ジをめくった。

しかし、次のページに描かれていたのは、一人の女性の胸像だっ  
た。きりっとした表情を、長い髪　黒炭で黒く塗られている

が縁取っている。二十代の後半くらいだろうか、少し古めかしいデ  
ザインの騎士服をまもっていた。

(女性の騎士……)

クラトーはその絵を凝視した。騎士服の襟元に描かれたエンブレムに、見覚えがあった。

無言でページをめくる。次に描かれていたのは、一人の痩せた男。やはり、先ほどの女性と同じ騎士服を着ている。

その顔は、昨日閲兵式で見た、シュリーレン宰相ロキユエ・セヴロンに酷似していた。

## 7 写生帳（後書き）

すみません、前話（1 - 6）少し修正しました。時系列が間違ってます（汗）

夕方早い時間、宰相が島に来てすぐに去る。セーターが熱を出す。灯台がつかないことにクラトーが気付く。夜になってからクラトーが島を訪ねる、の順で、一日のうちに起こった出来事です。

ロウソクの横の衝立：ランプスクリーン。金属製。お相撲の行司さんが持つてる軍配団扇みたいなのにスタンドがくっついたような形。団扇部分が上下して高さを調節できる。そういうものらしいです。

## 8 消された存在

翌日の昼にはどうにか起き出すことができたセシータは、暖炉の前の椅子に座って、シスターが淹れてくれた香草のお茶を飲んでいった。

昨夜はいくつも夢を見たが、黒髪のあの男の訪問こそ、ただの悪夢だと思いたかった。心の隅の方に追いやって、できるだけ考えないようにする。

どこにも連れて行かれなかったことに、心の底から安堵した。

「昨日、あの兵隊さんが来ましたよ」

シスターの言葉に、ハツと顔を上げた。

あわててカップをテーブルに置き、寝室を指さしてシスターを見ると、シスターはうなずいた。

(夢じゃ、なかったのね)

彼の顔を思い浮かべて、少しぼうつとしていると、シスターが彼女の顔を覗き込んで言った。

「急に顔色がよくなったわね。香草よりいい薬」

いたたまれなくなつたセシータは、思わず立ち上がった。膝かけが足元に落ち、急いで拾い上げて椅子の背にかける。

シスターに向かつて、片手を握つてからパツと開く動作をして「光」を表すと、セシータは返事を待たずに外に出て、灯台に向かった。

まだ本調子でないためか、灯室まで上りきると息切れがした。木箱に腰かけて息を整え、ふと顔を上げると、床に写生帳が開いたままで置いてあった。片付け忘れていたようだ。

写生帳を拾い上げ、その頁をじっと見つめた。クラトーが霧笛を

吹いている絵は、彼女の小さな胸をほんの少し温かくした。  
次の頁を開く。また、次の頁。そしてもう一枚。

写生帳を閉じ、胸に抱いた。

この数年、起こらなかつた何かが、起こりそうな予感がしていた。

沿岸警備隊の砦に、アイザルが荷物を搬入しに来た。

幌のついた小さなトラックを中庭に停め、次々と荷物を降ろすのを、クラトーが一覧表と照らし合わせる。修道院に運ぶ分もあったが、そちらはほとんどが食品だった。乾燥豆、乾燥果物、酢漬け野菜の瓶詰め……と確認していく。

あたりに人がいなくなつたタイミングで、アイザルは手を動かしながら言った。

「彼女のこと、調べましたよ」

クラトーはちらりとあたりを見回してから、返事をした。

「ありがとう。どうだった？」

「やっぱり、フォルツの貴族みたいです。外見や年齢が一致する。セシータ・シリッ・グラーズ嬢、五年前に国王陛下の養女になります」

国王の養女。立派なお姫様だ。それがなぜ、あのような孤島に。クラトーが思いを巡らせた時、アイザルが続けた。

「享年十一歳」

「!?!」

強張つたクラトーの表情に、アイザルの方が驚いたようだったが、そのまま続ける。

「養女になって一年で、流行り病にかかったとか。進行が早くて、故郷の家族が駆け付けける前に息を引き取ったそうです。感染を防ぐため、死亡後すぐに火葬され、家族は遺骨と形見の品を持って帰って行ったとか」

つまり、それから四年経っていることになる。

(四年……)

形見の品、と聞いて、クラトーの脳裏に閃いたのは、セシータが髪に挿していた金属製のペンだった。あれはおそらく、代替品だ。本来の彼女のかんざしは、おそらく遺骨とともに故郷に帰った。遺骨が彼女のものだと家族に思わせるために。

クラトーが会ったあの少女は、何らかの理由で死んだことにされているのだ。

再び、灯台に明かりが点るようになった。

クラトーは三日ぶりに、島を訪れた。この地方は曇りの日が多く、島はいつも木々が暗い影を落としていたが、この日は珍しく暖かな日差しが雲間からのぞいていた。

花房の垂れ下がる木々のアーチにも、いくつも光が差し込んで、足元に揺れる模様を描いていた。クラトーはわざと大きな動作で、小道を進む。気配に敏感なあの少女は、すぐに気がつくだろう。

修道院のドアをくぐると、二人のシスターが彼を迎えた。

「そろそろ来てくれると思っていたわ」

いそいそと荷物を受け取り、彼に菓子の入ったかごを押しつけて、外へ追い立てる。

クラトーは複雑な気持ちで、灯台の階段を上った。アイザルには

ここに住む少女のことは話していないが、事によっては話さなくてはならなくなるかもしれない。

灯室に明るい光が差し込み、木箱に腰かけたセシータの背を温めていた。

さっきまで読んでいた本は、今は閉じられて膝の上にある。少しでも勉強になることをしておきたいという気持ちから、彼女は本をよく読んだ。いつか故郷に帰ることができたその時に、周りに迷惑をかけたくないからだ。

梯子のきしみが耳に入り、セシータは上り口から顔を出したクラトーを見た。気配はとうに察していた。

「よう。熱出してたんだって？ 具合はどう？」

彼が尋ねてくる。セシータは大丈夫、と言うようにぎこちなくうなずいた。

そして、片手を上げた。クラトーを指さし、その指をすつと自分の方へ引き寄せる。そして、胸の前で何かを大事に抱きしめるような仕草を試みさせた。

三日前に来てくれたことが嬉しかったと、礼の気持ちを表したかったのだ。

クラトーはしばらく考えて、

「どういたしまして」

と返事をした。

伝わった。

自然と頬がほころんで、セシータは自分が久しぶりに微笑んだことに気がついた。

クラトーの右手が上がり、持ったかごをこちらに差し出した。セシータは立ち上がり、おそろおそろ近づくと、彼の手から直接、か

ごを受け取った。

何だか、自分が動物の仔になって、彼に懐きつつあるような心持ちがした。

差し向かいで黙って温かい茶を飲み、カップが空になったころ、クラトーが口を開いた。

「いつも俺ばかり、君に質問してるよな。たまには、俺の話でもしようか」

心臓が一つ、大きく鼓動した。聞いてみたかった、彼の話だ。

セシータはカップを置くと、揃えた膝に両手を重ねる。

クラトーは、セシータから視線を逸らすとレンズの方を見た。

「俺は、今はシュリーレンで沿岸警備兵をやってるけど、もとは違う国の生まれだ。ちよつと故郷にいらなくなっただんで、十六の時に家を出てきた。……別に、何か犯罪を犯して逃げ回ってるんじゃないよ」

セシータを見て、少し口角を上げる。セシータは小さくうなずいて、続きを待った。

「俺の家は、結構歴史のある旧家だったんだけど、祖父の代で大罪人を出して、取り潰しにあった」

さらに、と彼が言った。後から重さを増す言葉。

クラトーは、肩にひっかけてままだった銃を、銃床を下にして降ろした。銃口の下あたりに手をやり、取りつけられていた銃剣を外している。

「その時に、領地も大幅に縮小されたし家紋も変わっちゃったけど、別の名前で細々と血をつないできただけ、まあ良かったのかもかもしれないな」

外した短剣の柄に巻いてあった布を、くるくると外す。

「でも、俺の一族は、その時の罪は冤罪だと思っているんだ。いつかその罪が晴れたら、かつての家紋を復活させたいと願って、一族以外の誰にも見せることなく密かに身につけている」

クラトーは布を取り去った後の短剣を、刃の方を持ってセシータの前にぐつと突き出した。

「……こんな風に」

見ていいのかと迷う間もなく、短剣の柄に刻まれたその紋章が目に見えび込んできた。

一本の槍と何かの葉、そして文字を圖案化した紋章。

それは、セシータが写生帳に描いた人物の服にあったものと全く同じだった。

驚きのあまり、セシータは思わずそれに手を伸ばした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4762u/>

---

ささやきの帰る場所

2011年10月2日17時37分発行